

# 第四十一回 わたしからの 人権メッセージ

2021年度 特選作品集

堺市人権教育推進協議会

特選作品集

# わたしからの人権メッセージ

第四十一回

# 「わたしからの人権メッセージ」発刊にあたつて

堺市人権教育推進協議会では、人権を守り、平和で差別のない明るいまちづくりをめざして、市民主体の活動を進めています。その活動の一つかが、本年度で第四十二回を迎える「わたしからの人権メッセージ」です。多くの市民の皆様が日常生活の中の人権問題に関心を持ち、自ら考え緩ることによつて人権についての認識と理解を深め、さらに作品の共有を通して広く人権啓発になげることを目的として実施しております。

今年度も、私たちの呼びかけに幅広い年齢層の皆様から、数多くのメッセージを寄せていただきました。作品を応募していただきました皆様に心からお礼を申し上げます。厳正なる審査の結果、優秀な作品二十点を特選作品とし、ここに、「わたしからの人権メッセージ」特選作品集として本冊子を発刊します。

人権が尊重され、安心して暮らすことのできる平和で差別のない社会を実現することは私たちにとって共通の願いです。しかしながら、現在においても、インターネットによるいじめや部落差別、女性などに対する差別や偏見、また虐待など心を痛める事象が起っています。また、コロナ禍

における感染者やその家族への差別、貧困・失業など社会的弱者の置かれている状況が明るみとなり、新たな課題が見えてきました。さらに、世界では、多くの人々の尊い命が、戦争や民族紛争等により失われています。

堺市では、「堺市平和と人権を尊重するまちづくり条例」を施行し、すべての人の人権が尊重され、安心して暮らすことのできる平和と人権尊重のまちづくりを推進し、「誰一人取り残さない」持続可能な未来への目標であるSDGs<sup>エスディージーズ</sup>の達成に向けて取り組んでいます。

本冊子には人権が尊重され、平和で差別のない社会を創り出そうという応募された皆様の真つ直ぐな熱い想いと、真摯な姿勢には心を打たれるものがあります。私たちは、さまざまな人権問題を自分自身の課題として受けとめ、日々の生活の中で積極的な行動へと発展させていくことが大切です。

本冊子が、一人でも多くの方々に愛読され、私たちの身近にある人権問題を考えるひとつのかかけとなり、私たちのまち堺から人権文化の花を咲かせる一助になることを期待しています。

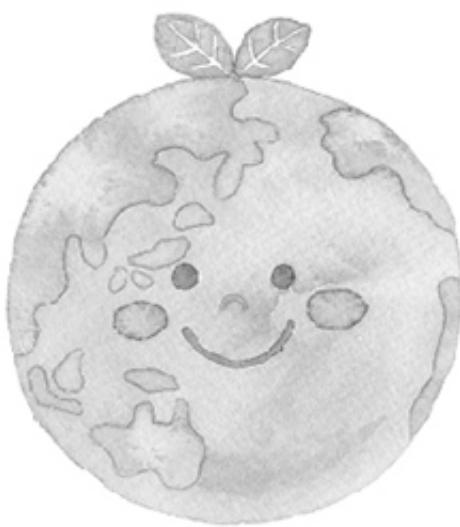
二〇二二年十一月

九

- コロナウイルス . . . . .
- 障がい者の人権 . . . . .
- 「広島、長崎からの伝言」を読んで . . . . .
- 今、私にできるSDGs . . . . .
- スーパーヒーロー . . . . .
- いじめについて . . . . .
- 幸せに生きる権利 . . . . .
- 聴覚障がい者の人権の差別 . . . . .
- 障害者の人権 . . . . .
- 自分の経験をいかして . . . . .

- ありのままの幸せ . . . . .
- 青海原を見続けるために . . . . .
- 新型コロナウイルスが奪つたものと見せたもの . . . . .
- その一心で命は救える . . . . .
- 今の私たちにできること . . . . .
- キャリア選択のジエンダーギヤップ . . . . .
- 希望を持つて生きる . . . . .
- ただ、違いを認識する . . . . .
- コロナ禍で大切にしたいもの . . . . .

※御本人の許諾を得られたものを掲載しております。



# コロナウイルス

小学校一年

服部

葵

わたしは、コロナウイルスが、だいきらいです。どうしてかというと、コロナのせいで、マスクをしないといけないし、いきたいところがあるのに、いけなくなつたりしました。コロナがなかつたら、マスクをはずして、みんなで、つくえをつなげてきゅうしょくをいつしょにたべたりできるのに、コロナウイルスが、あるから、いやなことがいっぱい、あるから、マスクをつけたり、しておかないとダメだからいまは、がまんをしているよ。コロナウイルスがなければ、いきたいところに、いけたのに、いっぱいできなくなつちゃつたよ。でも、コロナウイルスは、しようがないよね。なつばは、マスクがくるしいけど、くるしいのをのりこえて、みんなで、コロナウイルスを、がんばつて、おいだそう。

コロナウイルスを、がんばつて、おいだしたら、かぞくで、いろんなところいきたいです。コロナウイルスがなかつたら、いままであそんだ、おともだちもいっぱいあそびたいです。

# 障がい者の人権

小学校五年

東出桜里

人権とは、人の権利（健康に生きてたくさん学び自由に活動し国から守られ助けられながら生きていく権利）であり、全ての人々が人間らしく生きる権利で生まれながらに持つてある権利であって、誰にとつても大切なものの、日常の思いやりの気持ちによつて守らなければならないものです。

例えば、「女だから」と言つたり、「子どもだから」と言つたりして、その人をばかにしたり、いじめをしたりする人がいます。女も子どももみんな同じ人間だから、これはまちがつてゐる言葉だと思います。相手に気持ちを考えた時に、「子どもだから」「女だから」と言つてばかにしたりするのは良くない事です。

私には、障害のある弟がいます。話す事も立つたりする事も歩く事もできません。だから、お母さん、お父さん、私も手伝つて色々な事をやつていています。そうする事で、弟もよろこんでくれるし、お母さん、お父さんもよろこんでくれます。でも、私にとつてはそれが当たり前な事なのですが、外を歩いていると、車イスに乗つている弟を見たる人達は、弟の事をジロジロ見たり、小さい子が、「あの子大きいのにベビーカー乗つ

ている」「歩けばいいのに」と言つたりしてきますが、どうして車イスに乗つている弟をジロジロ見るのか不思議でした。でも私には当たり前の事で、ふつうの事だと思うから、わからなかつたら、私とお母さんに聞いてくれたらいにと思ひました。

最近になつて思う事は、障害のある人をジロジロ見るけど、困つてゐる時はなぜ声をかけたりしないのか、声をかける事が勇気のいる事で、できない人がいるんだなという事です。お母さんは、弟の車イスを押して電車に乗る時、いつも段が大変そうです。そんな時に、声をかけてくれる人がいると、「いつもありがとうございます」と、何回も言つてます。そして私もお母さんも「いい人やな」「良かった」と笑つています。だから、私も障害のある人が、生活していきやすいように、思いやり、助けてあげる気持ちが当たり前になるように、声をかけていつたり、困つてゐる人がいたら、手伝つてあげられたらしいなと思います。

# 今、私にできるSDGs

小学校五年 曽我部凜花

私は今回、SDGsの5番と11番を調べました。5番を選んだ理由は、クラスでSDGsについて話し合った時、話が広がったからです。

その時に出た例が、「スカート」でした。確かに、女の人はスカートもズボンもはくのに、男の人がスカートをはくと、なぜからかわれるのだろうと思いました。そうすると、ますます調べたりました。

5番の目標は、ジェンダー平等を実現しよう。つまり、性別の差別なく皆平等に、という意味です。日本では昔から、女は家の事をして、男は外で働くものとされてきました。だから、女の人が外で働いても、給料が少ないので。私は、日本のジェンダー平等がどれくらいできているか知りたくて、世界ランキングを調べました。すると、日本は何と153か国中121位でした。低くてびっくりしました。1位はアイスランドという国でした。日本と比べると大きな違いがある事が分かります。例えば、男性の育児休が取れりつは、日本が6%、アイスランドは85%です。国会議員の女性比率は、日本が10%、アイスランドは38%です。アイスランドでジェンダー平等がす

すんだのにはきつかけがありました。1975年に男女賃金格差が60%近くあつたことに抗議し、同一賃金を求めて国の女性の90%が一日仕事と家事を止めて「デイオフ」を取ったストライキです。結果、家事や職場から多くの女性がはなれたことで、社会における女性の存在感を示しました。

ストライキ後、女性の政治進出が進んだようです。さらに、ストライキの5年後には、国民から直接選挙される大統領選挙で初めて女性が大統領として選ばれました。

日本も、アイスランドをお手本にしてジェンダー平等がもつと進むとよいと思います。

次に、11番の「住み続けられる街づくりをしよう」を選んだ理由は、「私達が住む日本は、住み続けられる街なのかな?住み続けられる街ってどんな街?」と思つたからです。住み続けられる街にするには、地いきの人々の関わりが大切です。地いきの人々の関わりがうすいと、例えば、災害などのときに、助け合うことができず困るし、街の復旧も遅くなってしまいます。

金沢のある制服のリユース会社では、制服のおさがりを他のちいきで有効活用することで、家計の負担を減らし、他の地いきの人と人の新しいつながりを作つてゐるそうです。この話を知り、思つた事があります。私の姉が今年、小学校を卒業しました。姉は6年間大切にランドセルを使つていたので、傷も少なくきれいなまま残つていま



す。私は、そのランドセルが世界のどこかで活やくしてほしいと思います。もしそれが実現するなら私のランドセルも卒業後に活用してほしいです。そういう人と人のつながりのある世界になるといいと思います。

これからも、私にできるSDGsを考えていきたいです。

# 「広島、長崎からの伝言」を読んで

小学校六年

一九四五年八月六日に広島、九日には長崎へとアメリカ軍は二発の原子爆弾を日本に投下しました。空しゅうで家をなくした大人達、お父さんやお母さんを亡くした子ども達、戦争が終わつた後も放射能による被爆で苦しむ人々のことがこの本に書かれています。今年原爆資料館へ行つたことがきつかけで私はこの本と出会いましたが、読んでいる内になみだがあふれました。もちろん私は戦争を知りません。私のお母さんやおばあちゃんも知りません。でも私のおばあちゃんのお母さんはこの戦争を体験しています。おばあちゃんは今、九十二さいで広島県福山市に住んでいます。私はこの本についておばあちゃんに戦争の話を聞くことができました。実際に戦争を体験した人から話を闻けるのは、今ではとても貴重です。私はおばあちゃんからたくさんのことを学びました。たつたの数秒でたくさん人の尊い命や、当たり前の日常生活がうばわれたこと。大量の放射線と熱風で一しゆんにして町が消えたこと。そして、自分の意志と関係なく戦争にかり出され、どんなに家族といっしょにいたくてもいられない。戦争は何人の人権や気持ちをつぶしていつたこと。おばあちゃんの話を聞い

て私はどうしたら世界から戦争がなくなるかを考えてみました。もしも、日本とアメリカの人達がこの戦争で起こつた悲しい出来事を一人でも多くの人に伝えることができたら、世界は今よりもっと平和になると思います。戦争を知らない人に戦争のことを見つてもらうのはとても大切なことだとこの本を読んで思いました。当たり前のことをだけれど、私にはお父さんがいてお母さんがいて弟もいます。当たり前のことだけれど、私のおうちのばんご飯は毎日おいしくて、私はそれをおなかいっぱいに食べます。当たり前のことだけれど、朝目が覚めた時、私は「今日」という日にワクワクして、学校へ行くとそこには大好きな先生がいて友達がいる。戦争のことを色々と知るまでは何も感じなかつた。当たり前のことが、今ではとても大切に感じられるようになります。これからは、お母さんの言うこともよく聞いてお手伝いも勉強もがんばろうと思います。そして次の夏休みもつと戦争の本を読んでみようと思います。

# スーパーヒーロー

小学校六年 石丸岬希

ぼくの将来の夢は、医者になる事です。幼い頃に、ぼくの病気を治してくれた医師に出会えた事が、きっかけでした。その医師は、ぼくにとつてのスーパーヒーローでした。でも最近、このコロナ禍で、そんなスーパーヒーローであるはずの医師たち（医療従事者）が、差別にあつているという事を知りました。患者さんから感染しているかもしないから、医療従事者には近づかない方がいいと言うのです。医療従事者の子供とは遊ばないよう言つている親もいると聞きます。ぼくは、その話を聞いた時、とてもおどろいて、ものすごくショックを受けました。そして、何を言つているんだろうと思いました。コロナウイルスに感染してしまった人も、好きで感染したわけではありません。何かのバツで感染したわけでもありません。コロナウイルスは、病気なのです。そして、その病気にかかつて苦しんでいる人たちがいるのです。どうしてそんな人たちが、差別を受けなければならないのでしょうか。そして、医療従事者の人たちとは、そんな人たちを一人でも多く救いたいと毎日、必死で働いているのです。その人たちをまるで病原体のようにして差別する、そんな事は絶対にあつてはならないことだと思います。

差別をする人たちは、知識が足りないのだと思います。だから、うそのうわさ話を信じてしまつたりするのだと思います。差別をなくすためには、みんなが正しい知識を学んで、自分でしつかりと考えることが大事だと思います。ぼくも、たくさんの事を勉強して、正しい知識を身につけて、人の痛みがわかる、あこがれのスーパーヒーローのような医師になりたいと思います。

## いじめについて

中学校一年 富士杏奈

ユーチュープを見ている時、私は一つの動画に出会いました。

「十四歳女子中学生いじめ凍死事件。」

自殺と言われていますが、これは殺人だとも言われています。そもそもこの事件が起つた理由は「いじめ」。被害者の方は上級生や他校の人からひどいいじめを受けていました。担任の先生は、いじめは起こっていないと被害者のお母さんにうそをついていたそうです。

私はいじめをする人の気持ちがよく分かりません。嫌いだから? 気に入らないから? それだけでいじめた理由になるのでしょうか。私はならないと思います。なぜなら、いじめられた子が自殺してしまったり、そのいじめがトラウマになつて学校に行けなくなつたらどうするのでしょうか。罪悪感や後悔をせおしながら生きていくのでしょうか。どちらにしても、いじめたという事実は死ぬまでついてきます。ニュースに出ていないだけで、きっといじめは他の学校でもおこつていると思います。

この世のすべてのいじめをなくすことは難しいかもしれませんのが身近にいじめが起こつてしまつた場合は、なくせるかもしれません。

一つ目は、「友達といつしょにいじめられている子に話しかける。」です。一人でいたら、こんどはその子がいじめられてしまう可能性があるので一人でも多くの仲間を連れていじめられている子を助けましょう。

二つ目は、「信用できる大人に相談する。」です。自分たちの手で止められないと思つた時は、先生や両親に相談すればいじめはなくなると思います。

私は、この作文をとおして、人権について考えることができたんじやないかなと思います。人権とは、「人が人として生きる権利」だと教わりました。昔は、ひどいことを言つて人を傷つけてしまつたけど、今度からは発言に気をつけて人と接しようと思ひます。

もう一つ、作文を書いていて気づいたことがあります。それは、「自分が動かない」と何も解決しない。ということです。気がついたらがんばつて行動に移すことが大切だと分かりました。いじめはいつ自分が加害者になるか被害者になるか分かりません。被害者になつたら、誰かに助けを求める、加害者になつたら、いじめたことを反省する、どちらでもない場合は、いじめられている子を助ける。この三つを大切にしたいです。

# 幸せに生きる権利

中学校一年 猿田ゆらさるた

私は、人権とはどういうことが考えてみました。それは、人間が人間らしく生きていく権利だということを知りました。人間が人間らしくという言葉は当たり前だと思つていたので、どういうことを意味するのか考えてみました。

「高齢者社会」日本では二〇四〇年に六五歳以上の高齢者が人口の三分の一になるとニュースで観ました。介護という言葉も日常的に使われている現在、私にも九二歳の曾祖母がいます。曾祖母のお世話は毎日私の祖父母がしています。私の祖父母も七十歳前の高齢者です。高齢化社会と一言ではわかりにくいですが、高齢者が高齢者をお世話するということだと気づきました。私の母は介護職についているので祖母の代わりに、曾祖母の入浴の介助へ行つたりしています。私は母に、

「仕事休みの日に入浴介助つてお母さん仕事も介護なのにしんどくないの？」

と聞きました。母は笑つて答えました。

「全然！お母さんのおばあちゃんだし、おばあちゃんお風呂入れたら喜ぶからね。」

私はそうか、お母さんはひいおばあちゃんの面倒をみていくと思つていたけれど、楽し

んでいるんだと気付きました。私は介護という事をくわしく知りたくなり、母に仕事の話を聞きました。

「お年寄りのお世話つて大変？」

私が聞くと、仕事の話や介護の話をしてくれました。人は生まれた時から一人では生きていけなくて誰かのお世話になつてている事、そして誰もが年をとり、それに向かつて歩いている事、年をとることは自然な事であり自分たちの未来である事だと教えてくれました。好きで食事やトイレ入浴の面倒をみてもらおうと思つていてるわけではなく、それでも誰もが人の支えが必要になつてくることを知りました。曾祖母も私の名前を思い出せなかつたり、何度も同じことを聞いたりするけれど、それでも私も曾祖母が大好きです。物忘れがひどくなるとかわいそうだと思つていたけれど、母の話を聞いて手助けをしてあげたいという気持ちになりました。一緒に話をしたり手をつないで助けてあげる、こんな少しのことでも支えになるんだと知りました。

人権とは人間が人間らしく生きていく権利、この言葉の意味も高齢者の人権にあてはめてみると差別のない生活を送る権利、幸せに生きる権利があるんだという言葉の意味の深さを感じました。

# 聴覚障がい者の人権の差別

支援学校中学部二年 木全

匠

私は耳が聞こえない。なので、補聴器をつけて暮らしている。私と同じように、聴覚障害者で事故にあって亡くなつた女の子がいる。

その女の子の親は、逸失利益についての裁判をしている。理由は、女の子をひいた男の人が

「聴覚障害の人は学力が劣っているから健聴者の40%の逸失利益を払う。」と言つてゐる。簡単に言つたら、健聴者と、聴覚障害者は違うと、差別している。もちろん、健聴者とは耳の聞こえ方では違うが、学力は違わない。私が通つている学校の先生の中に、聴覚障害を持つてゐる先生も何人かいる。でも、給料は健聴者と全く同じと聞いた事がある。

差別もいけないことだが、もつとひどいと思つたのは亡くなつた女の子の未来を勝手に決めつける事だと私は思う。もしかしたらその女の子は大人になつて、会社をたてて、たくさんかせいでいた可能性もある。それなのに、男の人は勝手に、聴覚障害の人はいつまでたつても給料は安いままと決めつけてゐる。

私達聴覚障害を持つてゐる人でも、人権はある。自由に働く権利はある。「差別」と言う名のひどい暴力に聴覚障害者はいつまでもがまんしつづけてゐる。

時間はとてもかかるが、この世から、辞典から「差別」という言葉を無くしたい。

みんな平等に暮らせる世の中はいつ来るのだろうか。「差別」がない世の中はいつ来るのだろうか。

## 障害者の人権

中学校二年 川上竜駕かみ りゅう が

僕は小学三年生のときに股関節の病気になつた。その間、車椅子に乗つていた。車椅子での生活は力のない僕には動かすことが精一杯だつた。また、段差があるところでは自分の力だけでなく周りの人たちに助けてもらつたり、物を落としたときには気づいてくれた人が来てくれて取つてくれたりと周りの人に手助けしてもらつた。学校やシヨツピングモール、いろいろなところに行きましたがどこに行つても手助けをしてくれる人がいっぱいいた。

しかし、すべての怪我をしたり病気になつたりした人を助けるのは難しいと思う。だから世の中をより良く変えていくのが大切だと思う。例えば、スーパーなどに設けられている車椅子マークの駐車場や、電車やバスにある優先座席など、車椅子の人でも暮らしやすい設備がある。しかしそんな中、健常者が車椅子マークの駐車場に車を停めたり、優先座席で優先しなかつたりすることはすべて障害者などに対する人権侵害だと思う。こういった健常者による行為は悲しいほど多くあるのが現状だ。こういったことが起こるのはやっぱり自分がなつていなかからだと思う。自分がなつてなくとも相手のこ

とを考えることが大切だと思う。またそれは障害者だけでなく普段から誰にでもできること、いざというときの行動が変わつてくると思う。

そして、怪我や車椅子の人を見て「可哀想」なんて思つたことはないだろうか。しかし本当に可哀想なのだろうか。障害者の方々は「可哀想」なんて思われたいんだろうか。同情するときでも相手のことを考えて行動するのが大切だと思う。

ある人の言葉で「障害者を助けるんじやなくて、困つている人を助けてください。僕たちもそうやつてもらつた方がありがたいです。」こう思つてている障害者の方の方が多いと思う。また「太陽の家」という障害のある方でも働ける施設がある。この太陽の家は中村裕さんによつて作られた施設だ。この太陽の家、出来た頃はまだまだ小さく、依頼を受ける仕事も少なく中村さんはとても大変な思いをした。それでも諦めないで大手企業を回つた。するとオムロンという会社と共同で会社を作り、それからいろいろな大企業の支援を受けて今では多くの障害者が働いている。そして中村さんは「いつか太陽の家なんてなくなればいいのに」という言葉を残している。もしかしたら中村さんは障害者と健常者との壁をなくしたかったのかもしれない。また大企業が支援してくれたということは社会の風潮が変わつていつているに違いないと思う。ちょっとずつでも変えていけたらなと思う。

最後に、人権をすべて守ることはできないかもしませんが一人一人が自分、そして

相手のことを考えることは難しくはないと思う。障害者とか関係なくみんなでみんなを守っていく、これが人権を守る上で大切だと思った。



# 自分の経験をいかして

中学校二年 山崎さくら

僕が人権について深く思うことは「女性の人権・男女差別」についてです。昔は、看護婦という女性しか出来なかつた仕事もありますが、今は看護師と、男性も出来るようになった職業が多くあります。その中でも、職場における男女差別です。上司が「君、女だからねえ、こんな仕事まかせられないねえ」と性別を理由にした差別があるのを聞いたことがあります。もちろん、僕はおかしいと考えます。今は、そんなに無いかも知れませんけれど、昔はたくさんあつたと聞きます。もちろん女性と男性の体の構造は違います。ですが「女性は赤ちゃんを産む体だから」や「料理は女がやるんだ」などは、差別で、料理が好きな男性が居るかもしれないのに決めつけるのはよくないと思いました。

次に「女性の人権」です。自分が体験したこと話をします。僕は幼稚園児の時から、小学校の五年生までは、可愛い物が大好きでした。大きなリボンに、ピンクのスカート、流行の物を集めたり、可愛い人形を集めたりして「自分」を楽しんでいました。でも突然気持ち悪くなつて、「自分」を変えました。ピンク色のスカートや、派手な色の服を着るのをやめ、ズボンや暗い服ばかりを着るようになりました。母はそんな自分に気付かず、

スカートを買つて来たりしたこともありました。

そんな自分も、中学生になり自然に自分のことを「僕」と呼ぶようになり、学校の友達にはよく、「なんで僕なの？」と聞かれたりしました。ほとんどの人は気にせず接してくれるのです嬉しいです。

そして、中学二年生、僕は母にも聞かれました。そのときは「自然にこうなつた。」と話しました。その日からは母は、そのことについて話すことはなくなり、服も「自分で買っておいで」と言われるようになりました。今は小学六年生のときよりも「自分」を出せている気がします。

そして、中二の五月、髪をバッサリ切つて自分の好きな「自分」になれました。ある人からは、「ええ、長いほうが好き」と言われましたが、「似合つてる」と言つてくれる人もいて、今の自分を気に入っています。これからも、自分らしく生きていきます。

# ありのままの幸せ

中学校二年 下 茂 恋 羽

皆さんは人権とはなにか知っていますか。人権と聞いてすぐに差別を思い浮かべる方が多いと思いますが、それだけでは無いと思います。人権とは「私たちが幸せに生きるために権利」や「人間が人間らしく生きる権利」のことだと書かれています。もちろん、幸せと感じるものは人それぞれだと思いますが、何よりも笑顔で過ごせること、自分が自分らしく生きることが大事なのではないかと思いました。自分らしくてなんだろう、と改めて考えさせられました。よく、私も「貴方らしいね」と言われます。私もしくと思つてくれるのはなぜ?なにが?どこが?と思ひますが、その反面私のことを良く分かつてくれている。嬉しくなります。私のことをよくわかってくれている人は、これどう思う?と質問すると、「似合わない」としつかり答えてくれます。私は、それをいつもありがたいな。と思つて聞いています。中には、人に意見されるとムツとする人がいるようですが、私は自分をわかつてくれているからこそその答えだと有難く聞き入れています。見た目も性格も、ちょっとした癖や行動パターンを知つてくれているからこそ、そう思つてくれているのだと思います。そう考へると、実際顔を合わせて会うこ

と、目を見て話すること、一緒に笑つて怒つて泣いて、それがどれだけの人との信頼関係を築いていく大事なものなのかがわかりました。目の前で相手の表情を見ながら話をすることで、本当は嬉しいのかな、本当は悲しいんだろうな、など、表情から相手の気持ちが言葉がなくてもわかるのだと思います。

最近SNSで出会つた人と実際に会つて殺害されるというニュースをよく見ます。SNSは色々な人と繋がることで自分の知らない世界を知ることが出来たり、色々な情報を手に入れることが出来るとても便利なものです。私にとつて、楽しいこと魅力的なことがいっぱいのSNSが、どうして事件へと繋がっていくのか考えてみました。きつと魅力的な世界だから出しては行けない世界にまで足を踏み入れてしまい、事件に巻き込まれてしまうのだと思いました。また、人との直接的な交流が少なくなつてしまふことで偽りの自分を作つてしまい本来の自分を見失つてしまふことがあります。SNSは、名前も性格も全て変えることができ、ありのままの自分でいられる場所ではありません。私は、ありのままの自分を受け入れてくれる人が近くにいたらSNSで偽りの自分を作る必要はないし、そばで危険な世界に気付かせてくれるのではないかと思いました。

私だけでなく、私の周りの大変な友達が事件に巻き込まれないためにも、これからも上手にSNSを使い、人との直接的な交流を大切にしていきたいです。

## 青海原を見続けるために

中学校三年 益田 莉名<sup>ますだ りの</sup>

私は、毎日の生活の中で不思議に思うことがあります。それは、有料化されていないレジ袋があるということです。「二〇二〇年七月に、海洋汚染防止を目指したレジ袋の有料化が法律で義務づけられました。では、何故有料化されていないレジ袋があるのでしょうか。それについて私は、調べてみようと思いました。

調べてみると、有料化されていないレジ袋には、二つの条件がありました。一つは、厚さが〇・五ミリ以上の袋であることです。分厚いので袋として再利用が可能だと判断されたため、有料化から外されました。もう一つは、植物由来のバイオマス素材の配合率が二十五パーセント以上の袋であることです。「植物由来」というワードを聞くと、一見、環境に良いものと思われます。ですが、この素材は普通のプラスチックよりも細かい、マイクロプラスチックになりやすいため、環境に良くありません。このマイクロプラスチックは、海にどのような影響を与えるのでしょうか。

マイクロプラスチックには、海洋生物が餌と間違えて食べてしまう危険があります。これを食べてしようと、炎症反応や摂食障害を起こし、最悪の場合命を落としてしまう

こともあります。また、漁業や観光業などが経済的損失を受けてしまいます。このような被害を少しでも減らすために自分のできることは何だろうと考えました。

そこで見つけたのが「プラなし生活」です。プラなし生活は、プラスチックを減らす、なるべく使わない生活を送るというものです。その中で、私が今にでも実践できると思うのがこの三つです。一つ目は、まな板を木製に変えることです。木製にすると、メンテナンスで十年使うことができます。二つ目は、たわしをヘチマたわしに変えることです。私の祖父は、ヘチマを育てているので、枯れてしまったものをもらって、使うことができました。三つ目は、コットンのマスクを使うことです。プラなし生活の例を見ていくと、自分でも考えることができるのではないかと思いました。そこで、私は自分のプラなし生活を二つ考えました。一つ目は、ペットボトルを買わないことです。常にマイボトルを持ち歩こうと思います。二つ目は、固形の石けんを使うことです。容器の分のプラスチックがもつたいたいと思ったからです。

私は、有料化されていないレジ袋からプラなし生活について知ることができました。すべてのレジ袋が有料化されてほしいですが、その前に自分ができることを先に実践したいと思います。あの輝く広大な海を人の手で壊さないように、一人一人ができることを一緒にしていきませんか。

# 新型コロナウイルスが奪つたものと見せたもの

中学校三年 内野穂花

新型コロナウイルスが流行してから早一年四ヶ月。終わりが見えない日々の中、コロナが私たちから奪つていったもの。それは、自分や家族以外の人を思いやる気持ち、優しさだと思う。そう思つた理由を二つ、ここで述べさせてほしい。

一つ目は、コロナウイルスのワクチンを接種しない人への差別や偏見だ。日本では、このワクチンを打つか打たないかは自分で決めることができる。しかしながら、どう考えても強制接種になりかねない事例がある。それが、学校の先生から「ワクチンを打たないと単位を取らせない」といつた発言をされたり、会社で上司から「ワクチンを打たない奴は仕事に来るな」という内容を言われることだ。自身、コロナウイルスのワクチンは接種しない考え方だ。しかし、「単位を取らせない」と先生から言わると、「打たなければならない」という考えになってしまわないだろうか。打つ、打たないの選択が自分でできる以上、単位を取らせなかつたり仕事をさせないというのは、その人の自由を奪う、許されるべきではない行為ではないと思う。

二つ目は、コロナウイルスと近い現場で働いている人への差別や偏見だ。医療従事者

の方々はもちろん、保育園や幼稚園などで働いている方々、学校の先生など、コロナウイルスに感染するリスクが比較的高い現場で懸命に働いている方々への偏見や差別が問題になつてゐるのを知つてゐるのだろうか。その現場で働いているというだけで近所の人々から白い目で見られたり、その子供が学校で仲間はずれにされたりする。そんなことがあつて良いのだろうか。もし今懸命に働いている人々が皆その仕事をしなくなつたら、私たちは生活していくなくなるのではないか。差別や偏見をする側は軽い気持ちでしているのかもしれないが、もしその人たちがいなくなつたら、ということを考え行動してほしいと思う。

だが一方で、コロナウイルスにより人の優しさを感じた瞬間もある。それは、自分の中学校でコロナウイルスに感染した生徒が出て休校になつた時、インスタグラムのストーリーで「特定はやめよう。何も言うなよ」といつた内容の投稿を本当にたくさん的人がしていたことだつた。それぞ少なからず余裕が無い中、「本当に誰かのことを考えるというのはこういうことなんだろうな」と感じた瞬間だつた。

新型コロナウイルスが人々から奪つていつたもの。それは、自分や家族以外の人を思いやる気持ち、優しさだ。だがしかし、「本当の優しさ」が垣間見える瞬間もあつた。私はコロナウイルスが今すぐに無くならないのなら、奪われた分の思いやりと優しさを人間が一致団結して取り戻し、コロナウイルスによつて見えた優しさをそれぞれ惜しみなく出せるような社会にしたい。

# その一心で命は救える

高等学校一年 大峯花梨おおみね かはる

最近いじめで自殺したという記事を目にした。それを読んで私も以前いじめを受けた過去を思い出した。

友達、あるいは親友だった人達からのいじめであつた。最初は遊びで済んだが、それは段々とエスカレートし、いじめに変わつた。毎日のように逃げられ、透明人間扱い、姿の誹謗中傷、極めつけには「あなたは私の友達じゃない」と。何度も独りで泣いたか、何度も死にたいと思つたか。そんな日々が続いた。

これを見て先生や親に言えばいいじゃないかと思つた人はいるだろう。しかし、相談すればチクつたと言われこれが酷くなると思った。周囲に迷惑をかけたくない、自分が耐えればいい。いじめられている自分が惨めで恥ずかしい。だから相談しなかつた。

ある日、母に「学校で何か嫌な事されたの?お母さんには隠さず本当の事を教えて欲しい。」私は、今まであつた全てを泣いて打ち明けた。母はそれを聞いて「今まで気づいてあげられなくてごめんね。」と泣きながら言つた。

後日、それを部活動顧問に相談した。すると翌日いじめた加害者達が呼ばれ、話した。

加害者内一人は泣いて事実を否定した。顧問はそれをうのみにした。私は絶望した。

それから私は人間不信になり不登校になつた。しかし、毎日自殺を考えた私を支え、ここまで回復させてくれた両親には今でも感謝している。

いじめは人権侵害であり犯罪である。加害者には何故罰が与えられないのか疑問に思う。守られるべきは心に傷を負つた被害者である。

現在もいじめを受けている人は沢山いる。いじめはこの世から消える事はなくとも防ぐ事はできるだろう。

私が伝えたい事は、頼れる人が一人いるだけで一つの命が救えるという事だ。頼れる人になりたいと思える人がいるだけでこれらの世に勇気と希望を持ち、前を向いて進める人々が増える事を心から強く望む。

## 今の私たちにできること

私は、同和問題について取り上げる。その理由は、私がこの問題における加害者であり被害者でもあるからだ。

小学校に上がったころから、同和問題（被差別部落問題）について教育を受けてきた。その時から「差別はいけないものだ」と理解しており、これといって身の回りで差別が起きたことがなかつたため、差別問題はすでに風化した問題だと思っていた。それが自身に降りかかってきたのは成人をこえてからであった。当時お付き合いしていた方について、「どこの人なの？」と母から聞かれたことがきつかけであつた。私は何気なく答えただけであつたが、そこから母の様子が変わつたということは感じ取っていた。その時から母から「あそことあそこの地域の人とは関わっちゃダメよ」など具体的な地名を教えられ、その中には私がお付き合いしていた方が住んでいた地名も入つていた。これが部落問題なのだと心の中で思いつつも私は重くは受け止めていなかつた。それは誰と一緒にいようが、私個人の自由であると思っていたためだ。それとは裏腹に母の思いは辛辣なものだつた。「結婚はダメよ。」母から突然言われた言葉だつた。もちろん私は辛い。

は理由を聞いたが、「世間の考えがそうだから」というものであつた。私は、その答えの曖昧さに愕然とした。誰の話をしているのか分からなかつたからだ。話の焦点が私でもなく、相手の方でもない。なぜ世間を気にしなければいけないのだろうか。結果的に、この問題がきつかけで私は大切な人を失うことになつた。

総括して、差別というものは「社会的」な問題であると思った。社会、つまりは世間である。社会的な問題であるためすぐに対処できるような対策があるわけではなく、時間かけて風化していくのを待つしかない、ということが現状なのだろう。では、その中で私たちにできることを私からのメッセージとして伝えたいと思う。

私からのメッセージ、それは「自分の目で見て自分の中だけで部落問題について考えてみてほしい」である。なぜなら、部落差別については親から子へゆがんだ常識として伝わつてしまつていてることが、差別がなくならない理由の大部分を占めると思うからである。たとえ自分が今この問題に直面しなくとも、自分の子どもが直面する可能性もある。そのときに親としてどう行動するのか、自分の親から教えられたことをそのまま踏襲するのか本質的に一番大切なことは何なのかを想像するなどして考えてみてほしい。僕なら、一番大切なことは幸せになることなので、部落の方だからと言って一蹴することはしない。必ず自身の目で相手の方を見て判断する。

今の悲しい現実が将来にも引き継がれていくかどうかは私たち次第である。そういう責任を今一度自身で考えてみよう。

# キャリア選択のジエンダーギヤップ

成人

私は育児休暇を経て仕事に復帰した、いわゆる「ワーママ」である。有難いことに、職場では「家のこともあつて大変でしょう」と配慮してもらえるのだが、私はこの「ワーママ」という単語に少し違和感がある。何故なら「家事育児を主で担う母親が、仕事もしている」というニュアンスを含んでいるように感じられるからだ。対して、父親が働くのは当然であるからか「ワーパパ」という単語を耳にする機会は少ない。このように、性別による固定的な役割分担意識は無意識の内に刷り込まれており、時代の変化に伴つて徐々に薄れつつあるものの、この広く根付いた意識を解消するのはなかなか難しい。事実、今年のジエンダーギヤップ指数において、日本は120位、前年に引き続きG7の中では最下位であつた。

私自身においても、ライフステージが変化するにつれて、ジエンダーギヤップを身近に感じる機会が増えたようと思う。二年前、育児休暇中に夫のアメリカ駐在に帯同したこと。現地で知り合つた駐在員の奥様の大半は、帯同のために仕事を退職させていた。「妻の退職」が家族で一緒に暮らすための最善の選択だと理解できる一方、女性ば

かりがキャリアを中断する状況にモヤモヤとした複雑な気持ちを抱いたのを覚えている。駐在員の妻である限り、現地で仕事をすることは出来ないし、帰国後も子持ち主婦の再就職は厳しいと言われる中、何故女性だけがキャリアを諦めなければならぬのだろう。自身も育休満了が迫る中、このまま仕事を辞めて専業主婦になつた方が家族のためになるのではないか、自分の我が儘で幼い娘と夫を引き離してしまつて良いのだろうか、と何度も悩み、家族で話し合つた。悩み抜いた末、自分のキャリアを大事にしたいという思いが日に日に増し、私は娘と帰国して職場復帰することを決めたのだった。

復帰後は、仕事に家事育児と毎日が目まぐるしく過ぎていくが、やはり社会との繋がりがあることで自分の居場所を感じられ、仕事があつて良かったと心から思う。短時間勤務のため、時間的な制約はあるものの、テレワークが出来るお陰で仕事と家事育児の両立もなんとか出来ている。

今では、会社で配偶者の転勤による帯同・休職制度が導入されるなど、個々の事情に応じた柔軟なキャリア選択ができるようになつた。これは、夫が妻の転勤に帯同するなど、女性だけでなく男性のキャリア選択の権利も尊重されることを意味している。このような制度の充実はもちろん、ジエンダーギヤップ解消には「男だから」「女だから」こうあるべき、という一人一人の固定概念をなくすことが欠かせない。その為にも、私自

身が、次世代を担う子供に対して性別による役割分担意識を刷り込まないよう心掛け  
ていきたい。



# 希望を持つて生きる

成人 鈴木すず 藍あい

私は学生のころから精神障害を患っている。見た目は普通なのに、満員電車で呼吸が苦しくなる。学校にいけない。行けたとしても薬の副作用で勉強が全く頭に入っこない。その他さまざまな症状があり、精神科の病院へ入院も経験した。ある時ほとんど話さない弟から「精神病つてさ、心が弱い奴になるんだろう？お前つて家族や親戚中の恥さらしなんだぜ。もつと自分で自分を変える努力しろよ」と強い口調で言われた。私は確かに周りに迷惑ばかりかけてきた。それをわかつていたから、ただ「ごめんね…」とか言い返すことができなかつた。私はその日の夜、誰にも気づかれないようにこつそり一晩中泣き続けた。弟の気持ちがわからないわけではないからそう言われるのも仕方ないと思つた。しかし、だからこそ障害を持つている自分が自分で許せなかつた。

そんな私も現在、結婚して家庭を持つていて。また、自分が就きたかつた障害者支援の仕事に障害者雇用枠で採用していただき、ピアサポートとして携わつていて。ずっと支援してもらう側の私だつたが、ついに支援していく側に立つことができた。採用が決まつたときは、「私は私でいいんだ」と思えてすごく嬉しかつた。そしてこの間弟に

久しぶりに会つた時、「そういうえば昔はごめん…自分らしく生きろよ」と言われた。何のことか最初は分からなかつたけれど、弟は弟なりにあの日言つたことをしつかり考えて、うまく私に伝えてくれたのだと思つていて。

まだ障害は克服できていないけれど、うまく付き合つていくことが以前よりもできるようになつた。電車でヘルプマークを付けていると席を譲つてくださる方もいる。職場の方たちも同僚の一人として扱つてくれて、たまに心配もしてくれる。そして主人は私の障害のことを誰よりも理解して支えてくれている。私は私を支援してくれる人達のおかげで今生きることができていて。そんな私が今一番伝えたいことは、どんなに苦しんでもきっとわかる人がいるから、希望は捨ててはいけないとということである。

# ただ、違いを認識する

成人 金相弼

私は、目には見えない違いをよく理解するには、誰もが違うということを「ただ強く認識する」ことが大切だと思います。なぜなら、お互いの違いをある程度認めることはできても、お互いの立場に立つて正しく理解しあうのは非常に難しく、不用意な言動から望まない行き違いや軋轢が生じてしまうからです。

私はこの二十数年間、自分自身が在日コリアンであることを隠さずに生きてこられました。おそらくそれは、小学校から高校までの民族教育で学んだ歴史や文化と、家で当たり前に食べていた民族料理や使っていた言葉が、在日コリアンとしてのアイデンティティを育んでくれたからだと思います。そのため高校卒業後、日本社会に出てからも常に通名ではなく本名を名乗り、多くの友人や職場の仲間にも自ら在日コリアンであることを明かしています。

そんな私が社会人になつてから衝撃を受けた言葉がありました。それは私を含めた多数の人たち全体、あるいは、私個人をして、何気なく使われている「日本人」という言葉です。

ある時社内で開かれた会議の中で、海外拠点の技術レベルを向上させなければならないという話をされました。その際、上長から「：私たち日本人が現地に赴いてしっかりと指導していきましょう。」と言われたのです。またあるときは、会社のとある宴会での出来事でした。その日初めてお話しした方から、「日本で生まれずっと育つてきて、そんなに流暢に日本語が話せるのならもう日本人と変わらないな」と言われました。

彼らが私を否定したり、他の何か特別なことを意図して放つた言葉ではないことは感覚的に分かりました。しかし、どこか存在を否定されてしまったような気がして、頭の中では色んな自問が繰り返されていました。

（もしかして日本人だと本気で思っていたらどうしよう？これまで私がどんな思いで生きてきたかも知らずにどうしてそんなことが言えるのだろう？そもそも他の人たちはその人の何を見てあいつは〇〇人だつて思うのだろう？）

私にとっては「本名を名乗る」ことそのものが、私が在日コリアンとして生きていることの一つの証であり、誇りでもありました。しかし、実際には、そんなことは周囲にはあまり感知されないのでです。私の容姿や口調、行動などが、彼らが抱く私への印象として強く残っているのだと思いました。

私たちには、目に見えないアイデンティティや価値観の違いが当然あります。それを正しく理解するのは非常に難しいでしょう。だから、安易な気持ちで近づくのではなく、

「誰もが違うということ」ただそれだけを強く認識することができれば、自然とその違いが見えてくるのではないかと私は思います。



# コロナ禍で大切にしたいもの

成人 前川晃慶

新型コロナウイルスの感染が拡大する中、人権に関連する様々な問題が取り上げられている。例えば、感染者や医療従事者に対する差別的な扱いや言動があること、クランチーが発生した店や施設に対する過剰な風評被害がある等、様々なメディアで心の痛むニュースが多く報道されている。そのような報道がある中、私の家族も今年の七月にコロナウイルスに感染してしまった。

家族が住んでいる東京では病床が逼迫し、入院することが難しくなっていたため、中等症と診断された家族は自宅療養となつた。自宅療養的人には、食料の他に酸素濃度を測定する機器が支給され、保健所から体調確認の電話が毎日来ることになつていて。しかし、感染者が急増している最中は、支給には遅れが生じ、体調管理は毎日行われないというのが実状であった。自宅療養者は外出ができないため、感染していない誰かの助けが必要となる。家庭内の全員が陽性者となつてしまつた私の家族は、家族以外の誰かの助けが必要であった。大阪で暮らしている私には、電話で体調を確認することと、ネット通販で買い物を手伝うことしかできなかつたため、療養生活に必要なものをすぐ

に家族に渡してあげることができなかつた。そんな時に私の家族を助けてくれたのは、実家の近くに住んでいる友人だつた。保健所からの支給が届くまでは食料や日用品を、容体が悪化した時には薬や熱冷ましシート等の症状を緩和できるものを買って、家の玄関前まで届けてくれた。コロナ感染者の家に行くという行動を起こすためには、思いやりの他にも、勇気も必要であると思う。コロナに関する悪いニュースが多い中、友人の助けは単にありがたい事だけでなく、尊敬できる事でもあると感じた。

東京では今年の七月から急激に自宅療養者が増え、保健所の対応が追いつかなくなつていて、そのまま感染が拡大していくば、東京だけの話ではなくなる。そうなつた時、自宅療養者が以前と同じ生活を早く取り戻すためには、身近にいる人との繋がりと支えが重要となるのかもしれない。災害の多い日本では、有事の際に互いに支え合うことで様々な困難を乗り越えてきていている。それと同じように、コロナについても社会全体で支え合う風潮が見られるようになれば、差別意識は消える傾向になり、感染収束の兆しも見えてくるのではないだろうか。

コロナ禍では人との物理的な繋がりは極力控えなければならないが、互いに支え合うための精神的な繋がりは絶つことなく、今後も大切にしていきたいと、今回の経験を通じて強く思った。身近に困っている人がいて、自分にできることがあれば助けるという心がけは、今後も持ち続けたいと思う。

## 選考にあたつて

このたび「第四十二回わたしからの人権メッセージ」に応募していただいたみなさん、どうもありがとうございました。また、特選を受賞された二十名のみなさん、入選を受賞された三十名のみなさん、おめでとうございます。

今年度は、二千五百五十点にも及ぶ多くの作品が寄せられました。このうち小学生が七百八十四点、中学生が千三百点、高校生が三百九十五点、成人が七十一点でした。この取り組みにより、さまざまな年齢層の方からすぐれた作品が多く寄せられたことを、審査員一同、うれしく思います。選考では、一次審査で二千五百点を超える作品を五十点に絞り込み、さらにその中から二十点の特選作品を選出いたしました。審査にあたっては、さまざまな体験や知り得たことを自分自身の問題として捉えられているか、差別をなくすためにどのように行動しようとしているか、またその作品が広く市民の人権意識向上につながるものであるかを、大切なポイントといたしました。

今年度の特徴として、新型コロナウイルス感染症拡大が続く中、コロナ禍での差別に対する怒りや医療従事者への感謝が多く見られました。また、東京オリンピック・パラリンピックが開催された

こともあり、障がい者がスポーツを通して社会参画できる世の中を構築する大切さについて書かれたものもありました。小・中学校においては、平和・SNSでの誹謗中傷など、人権学習で取り組まれたものを中心に多くの作品が寄せられました。

どの作品からも、お互いを思いやる気持ちや人権に対する募る思いが感じられ、自分にできることが一生懸命考える真摯な姿勢に、強く心を打たれるものがありました。素晴らしい作品との出会いを、ありがとうございました。

また、メッセージとして届いていない人権課題や声なきSOSもあると思います。そのことを忘れず、私たちは今後も人権を守るために積極的な活動に取り組んでいきます。

「わたしからの人権メッセージ」を契機として、すべての人が人権問題を自分自身のこととして捉えて行動し、堺から人権文化の花が咲き、人権尊重の輪が家庭、学校、職場そして地域社会へと広がっていくことを願っております。

審査員長 山口典子  
(堺市人権教育推進協議会副会長)

御応募いただいた学校その他団体名

☆(株)クボタ堺製造所	赤坂台小学校	家原寺小学校	浅香山小学校	市小学校	英彰小学校	北極小学
☆堺自由の泉大学	錦西小学校	金岡小学校	金山小学校	金岡南小学校	さつき野学園(小)	北八下小学
☆大阪商業大学堺高等学校	新金岡東小学校	西百舌鳥小学校	泉州高倉小学校	登美丘西小学校	三宝小学校	城山台小学校
堺高等学校	日置莊西小学校	三原台小学校	東浅香山小学校	八田莊小学校	錦小学校	西陶器小学校
堺リベラル高等学校	長尾中学校	上野芝中学校	大泉中学校	八下西小学校	浜寺小学校	浜寺東小学校
☆だいせん聴覚支援学校	東百舌鳥中学校	☆五箇荘中学校	(大阪府立)堺聴覚支援学校	安井小学校	東三国丘小学校	東百舌鳥小学校
☆美原西中学校	平井中学校	八田莊中学校	津久野中学校	八下西小学校	福泉小学校	美原北小学校
☆(株)クボタ堺製造所	泉ヶ丘東中学校	浜寺中学校	浜寺南中学校	熊野小学校	北八下小学	熊野小学校

高等支援学校観

※五年以上連続で応募があつた学校や団体には、☆印をつけています。

第42回わたしからの人権メッセージ（2021年度）応募作品テーマ内訳表【応募数】

学年 テーマ	小学校		中学校			高等教育 /大学	一般	分野別 合計
	低学年	高学年	1年	2年	3年			
同和	0	0	3	4	1	8		
女性	0	8	47	20	7	82		
障がい者	1	32	148	28	15	224		
外国人	0	17	96	37	6	156		
子ども	3	41	114	11	5	174		
高齢者	1	3	12	8	3	27		
LGBT	1	18	103	26	1	149		
平和	40	282	46	14	2	384		
環境	2	19	75	59	1	156		
HIV感染者ハンセン病回復患者の人権	0	0	3	1	1	5		
犯罪被害者やその家族の人権	0	43	20	4	0	67		
インターネットと人権	1	16	99	42	0	158		
SDGs	1	45	38	21	0	105		
セーフシティさかい	0	8	0	0	0	8		
憲法と人権	0	7	2	5	0	14		
新型コロナウイルス感染症に 関連する人権問題	4	42	240	80	8	374		
その他の人権	10	139	254	35	21	459		
学年別応募数	64	720	1300	395	71	2550		
年代別応募数	784		1300	395	71	2550		

## 【今年度応募作品の傾向について】

○新型コロナウイルス感染症が拡大する中、医療従事者への差別に対する憤りや感謝を継ぐものが多数あった。また、自らの体験をとおして、現状に心を痛めつつも、どうすれば解決にむかいい、皆が幸せに暮らせるのかについて書かれているものが多く見られた。

○ゴミや水、プラスチック、地球温暖化といった環境問題だけでなく、教育と貧困の問題など、SDGsへの関心が高まっていることを感じさせられた。

○SNSでの誹謗中傷による芸能人の自殺をきっかけに、SNSの使い方はもとより、アプリ1つで人の命を殺してしまう怖さや、自らの身近な問題と重ね合わせて、このようなことをたくさんするためにどうすればいいのか、といった方に言及しているものが複数あった。

○米国におけるアフリカ系アメリカ人差別の報道を受けて、人種差別について考えたという作文や、LGBT・ジェンダー平等について書かれた作文が数多く見られた。共通して、肌の色や性別などで差別してはいけないと主張や、ともに生きることの大切さ訴える作品が多くあったことが印象的だった。

○今年度は、東京オリンピック・パラリンピックが開催されたこともあり、障害者スポーツについて取り上げているものも見られた。人権という観点から、スポーツを通して社会参画する姿を心に焼き付けていることが感じられた。

## 第42回 わたしからの人権メッセージ 特選作品集

2021年12月発行

編集・発行 堺市人権教育推進協議会  
〒590-0078 堺市堺区南瓦町3番1号  
堺市人権推進課内  
電話 072-221-9280  
FAX 072-228-8070

大伴和子	堺市総務局人事部人材開発課長
木谷浩	堺公共職業安定所管理部長
志村雅史	堺労働基準監督署副署長
瀧口住子	堺市立男女共同参画センター館長
富永さおり	堺市教育委員会生徒指導課指導主事
西 ひろみ	大阪法務局堺支局総務課長
西尾宣精	堺市人権教育研究会事務局次長
間野裕季子	堺市人権教育推進協議会会計
森内啓子	堺市人権教育推進協議会副会長
山口典子	堺市人権教育推進協議会副会長

この作品集は、「第42回わたしからの人権メッセージ」に応募された  
2550点の作品のうち、特選作品20点を掲載したものです。

